

日ポ・サロン会報

日ポ・サロン会報 第13号

発行日 平成25年3月20日
事務局 日ポ・サロン
〒595-0041 泉大津市戎町6-10
TEL.0725-32-6328
FAX.0725-31-3747
E-mail: donkawai@pearl.ocn.ne.jp



ワルシャワ大学日本学科へ寄贈された「萬葉集注釋」全22巻

13年の実り

NPO法人 日ポ・サロン 理事長

河合 康子

1993年に初めてワルシャワを訪れ、その地で日本学科の学生達が真摯に日本の事を学んでいる姿を見て感動し、この人達を一人でも多く日本で学ばせてあげたいと願い、数名の友人達と1999年9月に創設した日ポ・サロンも今年で14年目になりました。2001年には会報を創刊、2002年には初めての招聘留学生を同志社大学に受け入れ、2003年にはNPO法人を取得、2004年に神戸大学とワルシャワ大学の学術交流協定を締結、それからは神戸大学に迎えることになりました。そして昨年10月に11人目の留学生を迎え、神戸大学からもワルシャワ大学へこの8年間に9人の学生が留学し、ポーランドの人達の中に溶け込み交流を深めながら自らを磨いてきました。私共がこの13年間に関わったポーランド各地からの留学生は文部省の招聘留学生も含めて60人を超えています。始めの頃の留学生達はすでに博士号を取得し、ワルシャワ大学や京都大学で教鞭をとっていますし、日本企業に就職した人達やワルシャワで茶道の教室を開いている人もいます。また日本人男性と結婚した留学生も数名いて、昨年は女の赤ちゃんが2人誕生しました。皆夫々日本とポーランドの架け橋に成り責任のある仕事をこなしながら人生を謳歌しているのは本当に頼もしく嬉しいことです。

日ポ・サロンの初期の会員数は71名でしたが、そのうち34名が今も健在で、その後毎年新しい人々のご入会下さり、ここ数年余りは常に100名を超えています。その人達に支えられて、年々幅広く活動が続けられ、留学生を招聘出来ますことに心より感謝申し上げます。今後とも皆様のお力添えをどうぞ宜しくお願いいたします。

総会・講演会

2012年1月28日(土)

於/KBS「桐の間」

会員30名・留学生4名 出席

講演 「私の日本三景」

講師 ヤコブ・マルシャレンコ

(大阪大学大学院・人間科学研究科)

皆様、こんにちは。大阪大学大学院のヤコブ・マルシャレンコです。

ちょっと遅くなりましたが、新年あけましておめでとうございます。今年もよろしくお願い致します。皆様にとって幸せな一年となりますように。

今日の発表の本題に入る前に、そのきっかけを少しご説明させて頂きたいと思います。ポーランド人留学生のこの前の発表を振り返ってみれば、大体二つのパターンがあるのではないかと思います。

その一つは日本に来た当初にビックリしたり、驚いたりすることで、もう一つは、自分の研究というテーマだと思えます。しかし、私は日本に来ているのはもう3回目ですし、今回の滞在だけでももうすぐ4年目に入りますから、初めて日本に来たときにビックリしたことはもうあんまり覚えていないし、日本での生活に慣れてきている今は驚くことはあんまりないと思います。

一方、私の研究分野は法廷通訳、つまり外国人が日本の刑事裁判で被告人または証人や被害者として出頭した時の通訳ですから、その話をしてしまったら、皆さんが退屈してしまふ恐れがありますので、やっぱりなかなかいい発表テーマにはならないという結論につきました。

ですから、何についてお話ししようかなと思った時に、やっぱり人生で一番好きなことについてお話しするしかないと思いました。その「人生で一番好きなこと」というのは、簡単に言えば、旅行なのです。今は旅行しようと思ったら、円高という関係もありますので、海外旅行が有利でしょうが、今日は日本の国内旅行に限ってお話しさせて頂きます。

それでは、私が実際に日本のどこを旅行したかと言いますと、日本列島の最も大きな島は4島、7地方そして合計20都道府県へ行ったことがあります。地方で言えば唯一の行っていないのは東北地方ですが、都道府県でいうと行きたいところはまだまだいっぱいあります。さて、今日は行ったことのある場所から最も印象的となった3ヶ所を選び、「私の日本三景」をご紹介します。

まず、一番目の場所なのですが、北海道の東部にある釧路という田舎の町の付近です。そこに行ったのは、2006年の1月ですから、ちょうど6年前の話となります。ちなみに、初めての来日を考えると、昨日だったような気がするのですが、日付という客観的な面から見てみれば、年をとったなという結論はどう頑張っても避けられないですね。

ポーランドの冬とあんまりかわらない寒さの北海道でしたがポーランドにはみられないものが釧路にはあるのです。それは、日本文化を代表する有名な丹頂鶴なのです。

北海道へ行ったのは、日本に来てから初めて本州を離れたこととなります。その時、ホテル等をどのように見つければいいのかまだあんまり分らなかったのも、旅行会社の航空券

と宿泊の含んだパッケージで行って、非常に高い費用をかけてしまった旅行になりました。関西に戻ってきた時に友達に旅行や使ったお金の話をしたら、釧路という、札幌から見ても遠い田舎まで行った理由を聞かれました。「丹頂を見に行ってきたよ」と答えると、「鶴を見に？動物園にいけばそんなお金を使わなくても見れるのに・・・」と笑われました。

しかし、野生動物の好きな人にしか分からないことかもしれませんが、動物園のようにケージに閉じられた動物と自由に暮らしている野生動物を見るのは、全く違います。私は、動物園に行った度に、いくらきれいで、生活条件のいい動物園でも、そこにいる動物たちは囚人のようなかわいそうな存在としてしか思えません。その一方、自然環境の中で暮らしている動物たちは、大自然の力、そして「人間」という生き物もその大自然の一部であるという他ならぬ、すばらしい感動をさせてくれるのです。そういった意味でも、絶滅危惧種として指摘されている丹頂の自由を叫ぶ踊りを見るのは、本当に忘れられない、すばらしい経験でした。

北海道の冬も非常に寒いですし、セントラル・ヒーティングのない関西の冬も体の底までしみてくるので、次は、日本の南端である沖縄県へ行ってみたいと思います。当たり前ですが、日本というのは島国ですし、沖縄県も数多くの島々から構成されているのですが、沖縄県の諸島間の距離は他の都道府県の島々よりも大きいでしょう。

地図を見るだけでも分かると思いますが、沖縄諸島、宮古諸島、そして石垣島や西表島を含めた八重山諸島と言った、何百キロメートルの距離で離れた3つの海域があるのです。

日本人にも、日本に住んでいる外国人にも「沖縄は日本じゃない」とか「沖縄って別世界だ」などのように言っている人が多いと思いますが、それは沖縄のどこよりも八重山諸島のことを表す表現だと思います。地図を見るだけでも、日本の本土よりも台湾の方が近いということが分かりますし、沖縄本島の「メンソーレ」ではなく、石垣島に着いたとたん「オートリー」という言葉で迎えられます。

では、私の日本三景のうち、第二の場所の話に入りたいと思いますが、それは、石垣島と西表島の間にある6平方キロメートルにも及ばないという、わずかな面積を持った竹富島という場所です。

竹富島で過ごした時間はわずかな2日間だけでしたが、本当に忘れられない経験でした。日が沈むと、泊まった宿のオーナーさんと一緒に海辺へ出て、流れ星を見ながら、波や三線の音を聴き、いかに琉球らしい「涙そうそう」や「島唄」を歌い、このポーランド人も、一瞬「島人(しまんちゅう)」になったという思い出は、一生私の心から消されないでしょう。

最後に九州へ行ってみましょう。関西から九州へ行くにはいくつかの手段がありますが、新幹線や飛行機も高いし、やっぱり旅行というのは冒険でないといけなくて、「学生」という貧乏な立場にあった私は、夜行バスで行きました。

大阪から熊本までの何時間もかかったバス乗車は、狭くてそしてあんまり快適でない座席か、あるいは永遠までも終わらないスピーカーとバスの運転士の案内のせいなのか分かりませんが、いずれにしても、周りの日本人乗客はみんな寝ているのに、私と一緒に旅行しているハンガリーの友達という二人だけは、不眠の長い夜行乗車を過ごしたあと、やっと早朝に熊本に着きました。

しかし、実は九州へ行ったのは熊本が目的地ではありません

でした。2006年の夏、この初めての九州旅行の目的は阿蘇山、そして宮崎県の高千穂峡という2ヶ所でした。私の好きな場所はその後者です。初めての九州で一番驚いたのは、その信じられないほどの緑に満ちた景色でした。日本のどこにも森や林があるので、都会の中心を除いたら、比較的緑の多い国だと思っていますが、九州の南部より緑の多い場所は日本中にはないと思います。その印象の原因は、たぶん九州に自然が多いということだけではなく、その緑が濃くてとてもジューシーだということにあると思います。

日本にいと、当然のように聞こえるかもしれませんが、日本は一人当たりの自動販売機の台数は世界一です。九州の高千穂にも、自動販売機はもちろんあります。お寺や観光地に設置されていることは最初ビックリする外国人が多いと思いますが、なれてきたらそれらの存在をありがたく思う人も多いかもしれません。しかし、観光地となっている大自然の名所にまで自動販売機を設置するのは、なかなか疑問に思います。外国人の目で見れば、美しい自然を見に来ているので、自然の敵である現代性に満ちた技術がその景色を壊そうとしているような感じです。

幸いなことに、宮崎県の高千穂峡は自動販売機との戦いでは勝者なのです。自動販売機を何台設置してしまわれても、その美しさは負けず、日本人と外国人の観光客に忘れられない感動をさせてくれるのです。高千穂峡を旅行したのは日本に来たばかりの時でしたが、今でも高千穂峡のことを顧みると、なかなか大阪で楽しむ機会の少ない、日本列島の美しい大自然に感動します。

さて、私の今までの日本滞在で最も印象的な「三景」をご紹介します。十人十色ということわざがあるのですが、日本にいる留学生も、それぞれの好きな場所があるはず。「東京の秋葉原と六本木が最高!」、または「原宿のコスプレ大好き!」などのような様々な好みがある留学生にはあると思いますが、聞いて頂けた通り、私にとって「印象的」という場所は、なによりも「大自然」にあふれた場所なのです。

日本という国は細長い列島から成立されているおかげで、北には寒いロシア、そして南には台湾のような、温かい東シナ海に囲まれた国に近いのです。そのため、日本の大自然を代表する表現は何よりも「多様性」だと思います。

その多様性は、日本列島における生物多様性だけでなく、様々な習慣や歴史を持った文化多様性でもあります。今日の発表では日本の自然に注目しながらお話ししてきましたが、北海道のアイヌ文化、沖縄県の琉球文化などのような様々な文化や民族が混ざり、「日本」という国を、何百年もかけて作ってきたのです。

そして、何よりも「国際化」や「グローバル化」という表現がキーワードとなっている現在は、日本に来る外国人もますます増加しつつあります。そういった意味でも、日本は「単一民族」、または「単一文化」の国だとは言えなくなってきた、まさに最近言われている通り、「多文化共生社会」になりつつあると思います。

ご清聴どうも有り難うございました。

「総会並びに講演会」に出席して

橋本孝子

ポーランドへ御一緒しました皆様のなつかしいお顔、はじめてお目にかかる皆様もなぜか心の通い合うような親しみを感ずる集まりです。

事業報告、会計報告、役員紹介と続き、「日本は北海道から沖縄まで、気候、食べ物の多様性もさることながら、文化の多様性があり、緑豊かな美しい国である。」又「関西は、今を知るには大阪、文化を味わうには京都、奈良、和歌山、西欧的な神戸と選択肢が沢山ある。」とのヤコブ・マルシャレンコ氏のお話が印象に残りました。和歌山?と思いました。高野山を指しておられます。そういえば、一昨年、ポーランドへ参りました時に、お世話になりましたアドリアンナ・ヤボルスカさんのお母様が、クラコフからワルシャワに戻る際、ポーランドの聖地、ジャスナ・ゴラを案内して下さいました。「氣」に満ちているというか、人々のささやかな願いに満ちていて、さわやかな気分になったのが今でも思い出されます。又、震災後の国のあり方を語る時、世界を見渡しても日本は稀なる緑豊かな国であるという記事が目につきます。

東日本大震災の折には、ワルシャワ大学日本学科の皆さんから沢山の励ましのお手紙が寄せられました。そのコピーを見せていただきながら、悪筆の私など恥ずかしくなるくらい美しい漢字の真心溢れるお手紙です。

河合様からは、一昨年のポーランド旅行の2週間前、契約していた旅行社オルピスが倒産し、払い込んでいた代金が凍結されていましたが、弁護士であるアンドリアンヌさんのお姉様ご夫妻の御尽力により、百万円近くが戻ってきたとの報告がありました。

又、今年度の留学生、アンナ・ヴィエジュビッカさんは「故国の未熟児のための施設の力になりたい」と急遽、小さなチャリティーバザーを開き、本日3万数千円が集まり、和気あいあいのうちに閉会となりました。



「奈良・東大寺方面お花見」

2012年4月6日(金)
 会員26名・留学生5名参加

鳥谷悠子

日ポ・サロン恒例の春のお花見。お天気は曇りがちで雨は降っていませんでしたが、4月にしては珍しく冷たい風が吹いていました。

10時30分に近鉄奈良駅に集合、みんな時間通りに集まり、最初の目的地、氷室神社に桜を求めて出発しました。歩きながらあまりの寒さに桜が心配でしたが、氷室神社に着くと樹齢400年の見事なだけ桜が私たちを迎えてくれました。さすがに奈良で一番初めに咲く桜だけに寒中、春を告げていました。しばらく桜を眺め、境内を散策した後、次の目的地東大寺に向かいました。途中、寄って来る鹿も今日は心なしか寒そうに見えました。

東大寺の桜は寒い日が続いたせいか、まだ2、3分咲きぐらいでしたが、咲き始めた桜ごしに見る東大寺周辺の雄大な風景は、風情があつてとても良かったです。もし、桜が満開に咲いていた



ら、この素晴らしい景色は桜に隠されていたことでしょう。

東大寺は聖武天皇の発願で奈良時代の中頃に創建されましたが鎌倉時代と江戸時代、2度に渡って焼失し、今の建物は江戸時代に再建されたものだそうです。当時、柱に使う材木が調達出来ずに、創建当時の建物にくらべると横幅が三分の二に縮小されていますが、それでも木造建築としては世界一だそうです。

大仏殿の説明をうかがった後、中を案内して頂きました。普段は登壇できないところ、会員の方のお世話で特別に上げて頂き、間近に大仏様を見ることができました。今までこんなに近くで見ることがなかったので、改めて大仏様の大きさに驚きました。毎年、大晦日から元旦には建物正面の窓が開かれ、大仏様のお顔を外から見る事が出来るそうです。

東大寺から出ると曇っていた空から少し雨が降ってきましたので、昼食予定の新公会堂へ急ぎ足で向かいました。食事はお箸でいただくフレンチ料理。食堂は、日ポ・サロンの貸切で、5つのテーブルに分かれ、それぞれ楽しい話で盛り上がったことでしょう。私達のテーブルも日本大好きなアンナさんと一緒に、食事をしながら話が弾み、良い交流を持つことが出来ました。

ゆっくり食事をした後、庭に出て桜の木の下で記念撮影をして解散。

寒い一日でしたが、確実に春の訪れを感じさせてくれました。あと何日かすると桜も満開になり、奈良の街を桜色に染めてくれることでしょう。満開の桜を見ることは出来ませんでしたが、楽しい一日でした。今日のために、色々ご準備して下さいました方達に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。



日ポ・サロン 花見2012

過ぎ行く時を捉えよ。
 時事刻々を善用せよ。
 人生は短き春にして人は花なり。
 (サミュエル・ジョンソン)

モニカ・レチンスカ・ルフニェヴィチ
 (大阪大学文学部大学院)

今回、4年ぶりに日本に行くはずだったのは2011年4月の頭でした。しかし、3月11日の朝早く、寝ぼけて半寝半起で歯医者待合室のTVで私がぼーっと見ていた、まるでSF映画のようにありえなさそうにみえた放送は全てを変えた。結局、東北地方太平洋沖地震によって私の来日は、ほぼ1ヶ月間延期された。結局、今回2回楽しめるはずだった桜の季節とすれ違った。そうじゃなかったとしても、どうみてもあの時は花を眺める気もちっともしなかった。ですからこそ、梅雨の雨、夏の暑さ、秋の風と冬の寒さに負けず、2012年の春を無事に迎えた時に、日ポ・サロンに花見に誘われた時はとても嬉しかった。

花見の日朝早く起きて、JRで奈良市に向かった。4月にしては寒くて雨が降りそうな日だった。集合場所で集まっていた皆さんは桜の開き状態を心配していたようだった。5年ぶりにまたお会いが出来た日ポ・サロンのメンバーと今年の関西の各大学の他のポーランド人留学生と気軽に話しながら、東大寺を目的としてゆっくり奈良を歩いた。途中に参った神社や公園での桜は、今年の春の寒さに負けず、きれいに開けていたことに心を暖め、冷たい風に負けず暫く歩いてから無事に東大寺にたどり着いた。

その時点で、これまで何回も見てきた東大寺と大仏は、その日に全然違う面から見るチャンスを頂くということがまだ分らなかった。団体の特別観光ツアーで、別の入口で入って、東大寺中門通路の左側の回廊で準備していた椅子に座って、中の庭と大仏殿の素敵な景色を楽しみながら、ガイドの説明を聞いてた。そして、その後は思いもよらなかった大仏殿ツアーができた。今までただ遠くから眺めてきた大仏を、今回は手が触れるほど近くて親密な距離から見れた。普段に観光客が立ち入れない大仏の台に足を踏み、今までに目に見えなかった細部を感じて眺めた。神秘的な空間に入って、多分その日に初めて大仏の本当の偉大さを感じたと思う。

東大寺の刺激的な観光が終わって、心がいっぱいになってから奈良県新公会堂に向かって、1階にある「奈良迎賓館」で今度はお腹をいっぱいにする時間が来た。窓際の席に座り、窓を通して庭の有名な一本桜を眺めながら、フランス料理の美味しさを楽しんだ。食事する時はやっとな少し落ち着いて、ゆっくり話が出来る空間になり、久しぶりや今回初めて出会った方ととても興味深い話が出来た。だが、時間は残酷に流れていて、あっという間に帰る時間になってしまい、話が途中で終わった。それは今度の出会いの約束だった。今度また会って、話を続こうというきれいな、ものの始まりの春にふさわしい約束だった。

私の2012年の春は、その日から始まった。日ポ・サロンのおかげさまで、去年奪われた花見の楽しさを去年の分まで楽しめた。今度また会える日をお楽しみにしています。

「アンナさん送別会」

2012年8月1日(水) KBSにて
会員25名・留学生5名参加

“私の研究”

アンナ・ヴィエジュビツカ
(神戸大学国際文化学部)

今日は、今日は皆さんとお会いできる最後のチャンスです
ので、あつという間にたったこの一年間の感想をお話したい
と思います。

以前のスピーチの際、皆さんに感謝を表す機会がありまし
たが、何度表しても足りない気がします。私にとってこの一
年の留学は非常に貴重な経験でした。特に私の研究は日本に
来ないとできません。研究している新派劇は、歌舞伎やお能
のような人気のある分野ではないので、ポーランドで資料を
見つけるのはとても難しいです。正直に言いますと、神戸大
学への留学について知る前は、あきらめかけていましたが、
皆さんから与えられたチャンスで、研究を続けることが出来
ました。そのため今日の感想は新派の紹介から始めたいと思
います。

新派というのは明治時代に始まった演劇の一派です。実は
新派の始めは、演劇界ではなく政治にあります。明治時代は
封建社会の日本が文明開化しつつあり、天皇の権力が回復し
た明治維新から、民衆の政府に対する期待が非常に大きかっ
たのです。しかし、文明開化は基金が必要でしたから、新政
府は税金を期待通り減らさなかったばかりか、徐々に増加さ
せてきました。その結果、民衆の不満が高まって、全国に広
がり、自由民権運動の基礎となりました。その一つの活発な
グループが壮士でした。よく暴力をふるっていた乱暴な若者
であった壮士が、反政府演説で逮捕された数を自慢していま
した。壮士の一人であった角藤定憲(すどうさだのり)は逮
捕を避けるため、1888年12月に大阪で演説の代わりに
社会不平等や窮状を訴えた壮士芝居を始めました。これが新派
の発祥となりました。そのあとすぐ、川上音二郎も「改良演
劇」を発表して、壮士芝居をしました。素人の俳優によって
行われた壮士芝居が段々形をとりながら、新派となりました。

様々な新派の団体と俳優がいましたが、残念なことに、そ
れを全部話す時間はありませんから、私にとって一番面白い
人物であった川上音二郎に絞って紹介したいと思います。

川上音二郎は博多出身で、14歳の時、継母と折り合いが
悪くて家を飛び出し、大阪まで密航し、その後、東京に渡り
ました。長い間、職を転々としました。例えば、半年ぐらい
東京の増上寺で小僧となったこともあります。または偶然に
福沢諭吉と出会って、福沢が川上を慶応義塾の学生にしてや
りましたが、川上はそれもすぐにあきらめました。1882
年頃、京都の巡査になりましたが、中江兆民の演説に感動し
て、政治に興味を持ち始めました。「自由童子」と名乗って
壮士となり、政治批判の演説をしたという理由で100回以
上逮捕されたといわれています。壮士として活躍していた音
二郎は落語にも興味を持っていましたから、演説をもっと上
手に出来るようになるために、1888年大阪で桂文之助(こ
かつらぶんのすけ)という落語家の弟子になりました。

その時、先輩の桂藤兵衛(かつらとうべえ)の歌を真似て、壮
士の友人若宮万次郎によって書かれた歌詞を使って「オッペケ
ッペー節」を作りました。一回歌って、すぐに大ヒットになっ
たオッペケッペー節は今まで知られている歌です。図書館や本屋
で訊くと、または日本人と話す時に、彼は「オッペケッペー節の
川上音二郎」として知られていると私は気づきました。

政府に不満を感じていた民衆は、川上の歌で大喜びでしたし、
歌う音二郎と歌詞を載せた版画も売り出されていました。急に人
気を得た音二郎は落語家として活躍していましたが、角藤定憲の
壮士芝居のことをきいて、彼自身もやろうと計画を立てました。

堺の卯の日座で、初めて舞台にのせたのは「経国美談」と「板
垣君遭難実記」と言う芝居で、二つとも自由民権の事件を表す芝
居でした。1891年2月のことです。音二郎と他の俳優は合わ
せて15人でしたが、2、3人だけが俳優としての経験がありま
した。壮士は演説はうまかったが、舞台上がって、せりふを忘
れたりして、芝居は散々でした。しかし、演技より珍しさで人気
を得た芝居は大成功でした。その時から音二郎は相変わらず芝居
と演劇の改良に夢中でした。

堺での上演から半年も経っていない6月に、音二郎は東京の中
村座で芝居が出来るようになりました。歌舞伎俳優ではない川上
一座にとっては名誉なことでした。上演された「板垣君遭難実記」
が観客に好まれて、特によく乱暴して逮捕されていた壮士は、
立ち回り場面が上手に出来ていました。壮士芝居は歌舞伎界に軽
視されましたが、立派な俳優であった9代市川團十郎や5代尾上
菊五郎は弟子も連れて、川上一座の芝居を見に行っていたと言わ
れています。なぜかと言うと、素人の芝居であっても歌舞伎には
ない現実的な面があったからです。

音二郎の演劇の興味は段々深まっていき、西洋演劇を視察する
ためにフランスまで渡ったことがあります。フランスでどんなこ
とをしていたか不明ですが、日本に帰ると、自分の芝居に照明や
大道具などを設置して、新しく得た知識を舞台に見せました。推
理芝居であった「意外」は当たりで、そのあとすぐ、「又意外」
と「又々意外」が上演されました。ちょうどその時、1894
年8月、日清戦争が始まりました。川上は戦争に絶好なチャン
スをみて、すばやく脚本を作って戦争劇をしました。上演したもの
を出来るだけ現実的なものにするために、音二郎は朝鮮半島まで
渡ったことがあります。戦地で見たことを芝居にして、「川上戦
地見聞日記」という芝居をしました。死んだ兵士の制服を取って
帰って来たとか、韓国人を一人日本まで連れて帰ったという話も
ありますが、それは本当であるかどうか不明です。音二郎の性格
を考えるとそんなことまでやりかねないと思います。歌舞伎座に
芝居をしに誘われたほど成功でしたが、上演が終わった後、市川
團十郎は新派を軽んじて、割りなおさない舞台に彼自身は上がら
ないと言って強く不満を表していたと言われています。

川上一座の戦争劇は大成功で、人気のピークでしたから、音二
郎は自分の西洋風の劇場について考え始めました。しかし、珍し
くて新しい現象であった壮士芝居は段々人気を失っていき、苦勞
してやっと建てた川上座は、まもなく倒産してしまいました。演
劇界で失敗した音二郎は衆議院選挙に立候補しましたが、政治界
でも運が悪くて落選してしまいました。

借金で悩んでいた川上は絶望に陥って、日本から逃げたい気持
ちになったと思います。妻の元芸者だった貞奴と一座の連中を連
れて欧米の巡業に出かけました。アメリカで公演しながら全国を
回って、ヨーロッパまで渡って、ロンドンとパリ万国博覧会で首
尾よく上演しました。欧米で上演した芝居は非常に独特の特徴が
ありました。川上一座は日本の伝統的な演劇を舞台にするという

宣伝をしました。彼らの芝居は伝統ではありませんでした。実は歌舞伎ではなく、完全に新派でもなかったのです。観客の期待にこたえるのを優先せざるをえなかったのだと思います。そのため、日本語が分からない観客に芝居の内容を言葉の代わりに動作や表情で伝えました。又は欧米では芝居が2時間しかかからない習慣がありますから、伝統的な芝居を基にして勝手に内容を変えたり、短くしたり、切ったり、また合わせたりしていました。多くの演劇評論家が川上一座の芝居は余り価値のないものであったと言っていますが、完全に素人の芝居でもなかったと思います。確かに才能より自分の珍しさに入りがよかったのですが、立ち回りの場面と貞奴の舞踊は西洋でも非常に高く評価されていました。

川上一座は欧米で色々苦労はしましたが、結局、巡業は大成功でした。日本に帰国しても、すぐヨーロッパに渡って、各国で巡業していました。当時ポーランドという国はなかったのですが、川上一座はポーランドの町であったワルシャワとクラクフでも上演しました。

第二次欧米巡業から帰った音二郎は演劇を改良するために新しいアイデアを凝らしていました。西洋の演劇を真似て、開演中、客席を暗く、舞台を明るくしました。照明はガスの代わりに電灯を使いました。色電気を使って、夕日の光景を表しました。木戸銭をやめて、切符制度を導入しました。芝居の時間を5～6時間まで短くしました。まるで従来の演劇と変わった芝居でした。今では当たり前のことだと思いますが、初ものの珍しさはかなり好評を得ましたが、演劇界の関係者から不満が起きて、川上一座の座員が襲われたこともありました。でも、もちろん音二郎はあきらめませんでした。

劇場と芝居のやり方だけでなく、演じられた劇曲は新しいものも紹介しました。シェイクスピアを上演したのは川上が最初ではなかったのですが、欧米によく見に行った芝居をよく上演しました。「ハムレット」、「ペニスの商人」、「オセロ」などを舞台で見せました。川上によって造られたシェイクスピアの芝居の特徴は、当時の日本事情に従って翻案されたことです。例えば、川上一座の「ペニスの商人」は日本の新しい植民地の台湾で起こったとされています。

1904年に日露戦争が始まった時、川上はもう一度戦争劇を試みましたが、あまり入りはよくありませんでした。その時川上は自分の限界が分かったとされています。役者としての芸が決してうまいとはいえないことは劇評家、同僚俳優、音二郎自身も認めていましたが、マネージャーとしての手腕があったのは明らかでした。そのため、俳優引退を発表して、演劇の革命に全力を尽くそうと決心しました。川上の新演劇では女形ではなく、ほんものの女優が必要でしたから、女優養成所を開いて、妻の貞奴に経営させました。貞奴が15人の女を選んで彼女自身が襲いました。それは日本の初めての女優学校のようなものでした。

大人向けの芝居をするかわら、川上一座は先駆けとなった「おとぎ芝居」もしました。日本の各地を巡業する時、公演の初日の一日前に無料で小学校と中学校の子供向け芝居をするのは一座の習慣となりました。おとぎ芝居は勉強、忍耐、慈悲、正直、謙遜の徳を表して、子供の情操教育になっていました。

最後に川上音二郎によって実現されたのは、完全に西洋風の劇場、帝国座です。音二郎は川上座で失敗しましたが、自分の劇場を持つと言う夢は消えなかったのです。経済的な問題がたくさんありましたが、それを乗り越えて、1909年2月、大阪北浜で帝国座が開場されました。しかし、タイミングが少し悪かったのです。新派全体が人気を失いつつありましたから、帝国座も入りがよくありませんでした。この状況を心配した音二郎は、また俳

優として舞台にたちました。ところが、残念なことに、音二郎はもう長い間、腹膜炎に悩まされていたから、帝国座の開場から二年後に死亡しました。

川上音二郎の生涯の評価は色々あります。確かに論争を引き起こす人物でしたが、当時の状況を考える上で、演劇の革命と言う分野での業績は非常に高いと思います。彼の演劇の価値をもう一度考え直したほうがいいんじゃないかと私は思います。

しかし、私の留学の成果は研究だけではありませんでした。日ポ・サロンの皆様に歌舞伎やお能、宝塚歌劇、琵琶の演奏、またとても面白い上方落語に誘って頂いてありがとうございます。一番ユニークな文化経験は、曲水の宴に参加できたことだと思います。私にとって日本でも珍しい平安時代の十二単を着るのは非常に尊い経験です。今年は同級生の友達も何人か日本に留学していますが、彼らと話してみると、私の留学はとても恵まれたものだったと思います。

日本文化の経験について話す反応はいつも同じです。「ええ、私はそんな体験できなかったよ。アンナはラッキーだよ」と言われます。私もそう思います。さらに、美味しい日本料理を食べさせていただいて感謝しています。これからは神戸ビーフは夢みたいものになると思います。旅行が大好きな私にとって日本三景に入る天橋立につれていっていただいていたありがとうございます。

一緒に過ごした奈良の花見や京都の祇園祭はとても楽しかったです。また、この一年間で自分でもちょっと旅行しました。

2月は真冬の北海道に、留学生の友達と一緒に雪祭りに見に行きました。雪と氷の彫刻はとても印象的でしたが、網走での砕氷船乗船と零下15度ぐらいの露天風呂も忘れられない経験です。もう一方の日本の端である鹿児島もとてもよかったです。桜島にある活火山を初めて見ました。特に桜島の裏側にある、溶岩に埋もれている鳥居は印象的でした。日本の北と南の二つの端を見るチャンスがあってとてもうれしいです。

最後に改めて、私が行ったクリスマスバザーに参加してくださってありがとうございます。一緒にポーランドの未熟児を少しでも助けられるのは私の最大の喜びです。

今日のスピーチのため、一つだけ一番よかったところや経験を選びたいと思いましたが、それは無理だと分かりました。私の一年間の貴重な体験は皆さんのおかげです。また、チャンスがあれば、ぜひ日本に来たいと思いますから、今日は、これまでではなく、これからもにしたいと思います。この一年間お世話くださってとても感謝しています。本当にありがとうございました。

皆さまもお元気で過ごしてください。



「日本に来て」

マチエイ・コモロフスキ
(神戸大学国際文化学部)

当時4年生としての私にとって、神戸大学で交換留学できることは有り得ない幻だと思いました。でも留学した友達、多分皆様ご存知のMartaさんとAnnaさんから、神戸に関わる話を聞いて、不可能な幻は絶対欲しい望みになりました。そして去年の10月に事実になりました。一言で言えば、神戸での生活と神戸大学の留学は、私の人生



で一番大事な挑戦で、最高の体験です。私は国際文化学部の学生として非常に面白い授業を受けています。

ワルシャワ大学で50、60年代の日本映画に関わる修士論文を書いているところですから、神戸大学にも映画と関係がある授業にしました。一番面白いのは、日本映画歴史と映画の音についての授業です。そして、日本語の講座を聞くこと、日本語でレポートを書くこと、及び日本語で発表することが素晴らしい練習だと思います。授業のため映画を分析しながら、卒業論文のため資料を集めて読みながら日本語を楽しむことができます。

二番目の有難いことは日本文化の鑑賞です。日ポ・サロンの方々のおかげで日本での生活をとても楽しんでます。特に澤山様の御宅で過ごした大晦日とお正月は忘れられない思い出です。年越しそばと初もうでと、お節料理は、それは全部今まで体験したことがないことです。家族からとても離れているけれども、家族みたいな親切的な雰囲気の中で喜びました。それに金子様の御宅でこたつのそばの面白い話をいつまでも覚えます。

他の面白いことは部活です。撮影術の愛好家としてすぐ神戸大学の写真部に入りました。あそこでたくさんの日本人の友達ができました。一緒に暗室でモノクロフィルムを現像したりプリントを焼いたり、部屋でたくさん話したりします。ちょうど今、神戸まちづくり会館で私たちの展覧会が行われています。私も日本製の手動カメラで撮った写真を8枚出します。ほかに楽しいことを数えられないほどたくさんあります。

高島様のおかげでポーランド大使閣下との出会い。摩耶山への登り、温泉でのリラックス、寮から見た日の出の風景、紅葉、素晴らしい日本の食文化。また企てられる計画のあいだに特に二つの目的を大事にします。それは8月の南アルプスのハイキングすることと阪神・淡路大震災と東日本大震災にたいして日本人の記憶について写真集を作ることです。

日ポ・サロンのおかげで私の長年の夢をかなえられました。日本での留学と日常生活、そして日本文化を鑑賞できることをさせていただいて、どうもありがとうございます。

江崎昌子ピアノリサイタル

2012年12月1日(土)
ザ・フェニックスホール

煌く音色と深淵の調べ

江崎昌子 *Ezaki Masako* ピアノリサイタル

Program

- *エルスナー ソナタ第2番 ニ長調
- *レシェティツキ ショパンへのオマージュ イ長調 作品46-9
- *ショパン 4つのマズルカ 作品24
- *ショパン バラード第2番 ヘ長調 作品38
- バラード第3番 変イ長調 作品47

～ 休憩 ～

- *ショパン 即興曲 全4曲
- *ショパン アンダンテ・スピアナートと華麗なる大ポロネーズ 変ホ長調 作品22

ごあいさつ

江崎昌子

本日は、お忙しい中リサイタルにいらして頂き誠にありがとうございます。

私は中学生の頃ショパンに強く惹かれ、いつか必ずポーランドに行きたい!という確固たる夢を抱きました。その後、大学一年生の時ワルシャワのある家庭にホームステイしながら夏期講習を受けるという素晴らしい機会に恵まれたことや、後に留学してから下宿していた音楽家の家庭での生活などは、私の勉強全てを支えてくれた礎と言えます。ポーランドのショパン演奏家であったスメンジャンカ先生が、「ショパンが祖国ポーランドを愛し、その文化の息子でもあったと言えるように、ショパンを知ろうとする時ポーランドの文化や風土を知ることが重要」とおっしゃったことが印象的です。

私は学生時代、二度に渡ってポーランドの家庭にホームステイポーランド人の生活や様々な文化に触れることのできるチャンスを頂きました。日ポサロンの皆さまは、ワルシャワ大学の日本学科の学生の留学を支援し、一年間に渡ってお世話をされるという、学生にとっては夢のような環境作りのために素晴らしい支援活動をされています。スメンジャンカ先生のお言葉のように、その土地に身を置いて学ぶことは、五感でその言葉や文化を吸収する何にも代えがたい最良の経験です。

本日の演奏会を企画して下さいた日ポサロンの方々に敬意を表し、また本日の留学生支援コンサートにお越し頂きました皆さまに感謝の気持ちを込めて、私が大好きなポーランドの作曲家三人の作品を心を込めて演奏いたします。本日はどうもありがとうございました。

「曲水の宴に招かれて」

アガタ・ヴェルボウスカ

2012年4月21日に後一人のポーランドの留学生アンナさんと一緒に十二単の着物を着て、西宮市の北山緑化植物園での曲水の宴に参加した。

着物を着たことがあっても十二単を着るのは全然違う体験だった。このような本当に素敵で、写真以外あまり見られない着物を着る機会があるなんて夢にも思わなかった。準備には大分時間がかかり、さすがに複雑な行為だった。最初にかつらは少し硬く、重く感じたが、慣れた後気にしなくなった。そして、十二単を身に着けている、かつらをつけている、化粧をしている自分の姿を見た時、びっくりして、信じられなかった。少し夢のような違う人を見ているような気がした。

曲水の宴の日は本当にふさわしく、いい天気があった。寒くも暑くもなく心地よい温度で、植物園内で行事を行った。



植物園の景色はきれいで、まだ咲いている桜の木もあった。曲水の宴の参加者は水のそばに座り、流れてくる杯を取り、お茶を飲み、句を作った。これすべては忘れられない雰囲気になった。自分で句を作ることが難しく思い緊張したが、宴の前少し考えて来たため、書くことが出来た。十二単を着て、庭の中の小さな川のような所に座り、他の参加者の詩を聞き、まるで過去へ行ったのか夢の中にいる気がした。この独特な雰囲気を楽しむ間に、時間は本当に早く経過した。気づかないうちにすべてが終わり、帰る時間になった。少し残念だと思いつつ、洋服に着替えた。

会員の緒方満智様のお力添えで、曲水の宴に参加することが出来ました。この日は絶対に忘れられない思い出になった。これからはこのような素晴らしい行事に参加させられ、本当に嬉しく感謝を込めて考えていく。

桜散る
恋人偲び
ふささこの
時間の流れ
川のように
散っている桜

アンナ
アガタ
2012年4月21日
4月21日

在大阪ポーランド共和国名誉総領事退任のご挨拶

前在大阪ポーランド共和国名誉総領事

高島和子

昨年長兄、故高島浩一初代名誉総領事と合わせ3期15年の任期を全うし退任させて頂きました。この間、皆様から賜りましたポーランドへの応援に対し心から厚く御礼申し上げます。

日本を正しくよく理解して欲しいとの願いからハーバード大学、カリフォルニア大学に続きワルシャワ大学日本学科を支援する基金を設立していた関係で、ポーランド政府から重なる要請に基づき、鉄鋼事業の傍ら名誉総領事を引き受けていた長兄が亡くなり、躊躇しつつその遺志を引き継ぐ決心をしました。最初のうちは数々の重責に押しつぶされそうになりながら、次兄や親友達、会社の方々に励まされ皆様の応援を得て、数度の記念事業やビジネスミーティング、大統領ご一行をはじめ賓客の京都案内や刑務所慰問などの課題に取り組んでまいりました。

それらの仕事のかたわら、高島浩一記念茶室「懐 庵」建設に取り組み、数奇屋設計士、大工4名、左官、庭師2名がワルシャワに一ヶ月半滞在して四畳半と二畳台目の茶室、水屋、腰掛け待合、露地がワルシャワ大学中央図書館に出来上がり、茶室抜きを致しました。

日本文化の粋を伝えるものとして茶道の普及はもとより、必要に応じて日本学科の授業が茶室で行われ、侘び寂びを実体験し、また嬉しいことに大統領夫人をはじめ閣僚方や日本大使館関係のお客様の茶室訪問が続き、国際交流を深め日本文化を伝える役目を果たしています。

力不足の私には他国からの信任を受け代表の1人となることは身に過ぎた体験でしたが何よりもワルシャワ大学日本学科の教授方の熱意溢れるご指導や家庭を持ちながらも交代で日本留学を果たし論文や著書を次々に出稿されるその姿勢、それに応えて入学後二週間でひらがなカタカナを覚え、一週間に25字ずつの漢字を会得し、三年生になると文庫本を手にする学生達の真摯に勉学に励む姿に打たれました。また、ポーランド人気質として、地続きの隣国からの支配や虐殺を経験し乗り越えた愛国心の強さ、誇りの高さ、その苦しさの中でもクリスマスには見知らぬ人が訪れても食事を提供出来るように一皿余分にセットするという驚きの優しさ温かさ(TVが突撃インタビューで調査したら60数%の家が招き入れた。私が留学生に今も？と確かめたら当然ですよと。)週末には多くの方がコンサートに行き近郊の別荘でゆったりと過ごす。大正時代にシベリヤのポーランド人孤児756名を助けた逸話が感謝と共に今に語り伝えられ、神戸大震災の孤児達30人が、その時のお礼にと民間の方々に招かれ、恩を忘れず大変親日的であり、意欲ある若者が育ち未来が明るいと感じたことは、この仕事を通して学んだ一番尊いものでした。進出日本企業も270社を超えますます日本との交流も

盛んになると感じています。ポーランドと日本の益々の友好発展を祈って退任のご挨拶と致します。心からの感謝と共に。

ワルシャワ大学日本学科からの感謝状

「萬葉集注釋」全22巻ワルシャワ大学 日本学科へ寄贈について

澤 瀧 徹 郎

今回、寄贈主澤瀧久方氏の心温かい善意により、表記蔵書寄贈を受け、ワルシャワ大学へお届けする運びとなりました。

著者のご家族様一同も寄贈実現を大変喜んで頂き、全面的なご協力を頂きました。

昨年11月初旬に当方よりワルシャワ大学日本学科への寄贈申し入れに対し、Ewa Palasz Rutkowska日本学科長より、全巻受け取りしたい旨の快諾連絡を受け、川西市の澤瀧久方氏自宅に出向き、早速発送作業に取り掛かり、国際スピード郵便にて発送を終えました所、11月30日早朝に“本日「萬葉集」全巻無事日本学科に到着しました”との嬉しい一報にホッと、日本学科長より「本当に立派な本です。『萬葉集注釋』のお蔭でワルシャワ大学日本学科の学生達、教授達はより深く日本文化を理解し、今後の研究に大いに役立つものと存じます」との添え書きもありました。又、「世界中の日本学者が切望してやまない文学研究資料である「萬葉集」全22巻を所蔵出来ることは、日本学科の誇りです」とのお言葉もありました。

日ボ・サロンが寄贈の仲介に少しでもお役に立てたものであれば大変嬉しいです。



ワルシャワ大学日本学科
JAPONISTYKA UNIWERSYTET WARSZAWSKI
UL. KRAKOWSKIE PRZEDMIEŚCIE 26/28
00-927 WARSZAWA TEL. 22 55 20 464

ワルシャワ大学東洋学部日本学科長
エヴァ・パワシュ＝ルトコフスカ教授

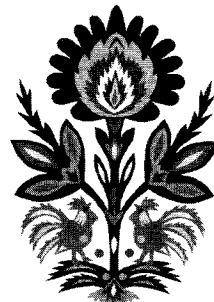
この度は、澤瀧久方様の『萬葉集注釋』ご寄贈の仲介の労を取っていただきまして、本当にありがとうございました。おそらく世界中の日本学者が切望してやまない文学研究資料であるこの『萬葉集注釋』全22巻を所蔵できることは、私ども日本学科の誇りとも思っております。

また、サロンの皆様には留学生招聘など長年にわたり私ども日本学科をご支援していただき、感謝の言葉もみつかりません。留学から帰ってきた学生たちは、本当の意味でポーランドの文化交流の架け橋として多分野にわたって活躍しています。このような形で皆様からのご支援を役立てることが出来る幸せをつくづく感じております。

今後の貴サロンのご発展と、会員の皆様のご健康をお祈りしております。

Kierownik Zakładu Japoznawstwa i Japonistyki
Wydziału Orientalistycznego UW

dr hab. Ewa Palasz-Rutkowska, prof. UW



蔵書目録

書名： 「萬葉集注釋」全22巻
著者： 澤瀧久孝（1890.7生～1968.10没 享年78歳）
出版社： 中央公論社 1968年 朝日賞受賞
寄贈主： 澤瀧久方（著者・澤瀧久孝氏のご子息様・川西市在住）
輸送作業担当： NPO法人 日ボ・サロン
責任者 澤瀧徹郎

寄贈書目録と貸出について

会員の藤村恭司様がポーランド関係の書籍とCDをご寄贈下さいました。下記の通りです。

私たちのポーランドの知識が広がりますのは有難く嬉しいことです。貸出購読ご希望の方は、お知らせください。

<ビデオテープ>

1	影(CIEN)	10	尼僧ヨアンナ
2	地下水道(KANAL)	11	鉄の男
3	夜行列車		
4	水の中のナイフ		
5	灰とダイヤモンド		
6	大理石の男		
7	夜の終わりに		
8	パサジェルカ		
9	約束の土地		

<書籍>

1	牛乳に鞍(ポーランド私見)	工藤幸雄/共同通信社
2	ぼくはポーランドを旅した	小中陽太郎/筑摩書房
3	ポーランドからの手紙	伊丹敬之/筑摩書房
4	ポーランド(上)(下)	ジェームズ・ミッチェナー(工藤幸雄訳)/文芸春秋
5	ポーランド現代史	伊藤孝之/山川出版社
6	もっと知りたいポーランド	宮島直機編/弘文堂
7	ポーランド旅行	アルフレート・テープリン(岸本雅之訳)/為影社
8	ポーランドを知るための60章	渡辺克義/明石書店
9	ポーランド入門	阪東宏/三省堂選書
10	「灰とダイヤモンド」の国	稲村卓/文芸社
11	アウシュヴィッツからの旅	鈴木明/講談社
12	夜と霧	V.E.フランクル/みすず書房
13	東欧の歴史	アンリ・ボグダシ(高井道夫訳)/中央公論
14	ポーランド史	ステファン・キエニエヴィチ編/恒文社版
15	東欧を知る事典	/平凡社
16	母と子で見るアウシュヴィッツ	早乙女勝元/草の根出版会
17	アウシュヴィッツと私	早乙女勝元/草の根出版会
18	ぼくのポーランド文学	工藤幸雄/現代企画室
19	ポーランドの国と人々	在日ポーランド大使館編/ポーランド通信社インタープレス/恒文社
20	ポーランド未だ滅びず	本間精一/東洋出版
21	ポーランド・コンプレックス	タデウシュ・ゴンヴィツキ(工藤幸雄・長興容訳)/中央公論
22	ワレサ自伝	筑紫哲也・水谷麟 訳/社会思想社
23	ワルシャワ物語	工藤幸雄/日本放送出版協会
24	ワルシャワ貧乏物語	工藤久代/鎌倉書房
25	ポーランド労働者の反乱	芝生瑞和 編著/第三書館
26	アンジェイ・ワイダ自作を語る	ヴァンダ・ヴェルテンシュタイン/平凡社
27	アンジェイ・ワイダの映画	ボレスワフ・ミハウエツク/フィルムアート社
28	ポーランドの民話	/恒文社
29	ポーランドの民話	関口時正 他訳/恒文社版
30	ポーランド文学の贈りもの	土谷直人/新読書社
31	ぼくとポーランドについて、など	工藤幸雄/共同通信社
32	ポーランド革命	岡田治夫・工藤幸雄・佐久間邦夫/亜紀書房
33	ワルシャワ スケッチ	三浦元博/筑摩書房
34	ワルシャワのドンキホーテ	牧瀬忠廣/めんこ発行
35	ポーランド紀行	新名哲明/批評社

関西在住日ポ・サロン後援留学生(2012年度)

アドリアンナ ヤクボルスカ	大阪大学大学院
ヤクブ マルシャレンコ	大阪大学大学院
ヤヌシュ ミトコ	京都大学文学部大学院文学研究科
マルチン タタルチュク	京都大学文学部大学院
モニカ・レチンスカ・ルフニエヴィチ	大阪大学文学部大学院
アンナ ヴィエジュビッカ	神戸大学国際文化学部
アガタ ヴェルボウスカ	神戸大学経済学部大学院
マチェイ・コモロフスキ	神戸大学国際文化学部
マリラ・ハンナ・オブシャースカ	神戸大学経済学部大学院



編集後記

会報製作にはアトリエぶらりすけっちの竹居様ご夫妻が気持ちを込めて担当して下さい、2012年度の活動記録として会報13号を皆さまにお届けすることが出来、感謝いたします。刷り上がった会報を読ませて頂き、会員、留学生からの原稿は豊かな内容で心打たれ多くの学びです。

会報発送時に会員名簿を見て、まだお出会いたことのない会員様も多いですが、遠くからの支援もあり、メル友ならず名簿友としての親しみを感じさせて頂き心嬉しくなっています。

会報をお読み頂いての感想や皆様の近況をお知らせ下さい。会報が会員同士の友情を交わす場ともなれば何よりの喜びでございます。(岸本記)

